

フラスコの中の稀有な例

日野笙子

記憶が消えた日、それは春とは違った季節のようで、闇の箱がある小屋だった。ドアの絵柄に船の舵がついていた。微小で透明な薺が壁に絡まっている。青年が、かなしみを消す「実験集」をひもといた。ドライアイスで泡立つ蒸留器、首のところが曲がったレトルトで、記憶が、一滴また一滴と斜するフラスコのようだつた。浄化という言葉に疑問を持つていたから、失つてみて、人は何かを知るという、自分の感覺の根拠に気づくことは、いつだつて青年の感じる器官への疑いをわかせていた。生息をはじめる前からある、グレーの空から降りる零は、次々と繰り返し降るものだという思い込みを、彼も確かに重ねていた。

ぼくはある日ブラックボックスに落ちたのだ。自分の心など実験するわけにいかないから、心の死角の闇に彷徨うだけだ、と青年は思う。突然、空の果てが終わりを告げたときに、涙は出るのかもしれない。雨だれはいつかは止むことを知るのだろう。フラスコの立てる音を聞いた。水滴が分裂して連鎖反応を起こす。悔恨とルサンチマンにさえ不信の感官。それとは別の感官で、ぼくは生きている時間さえもうむなし。忘れる、忘れる、音を立てて、首の曲がったフラスコがささやく。かなしみを閉じ込めてはいけません。傷ついたガラスに触れる矛盾と対立を、実地で経験したように、かすかに声がふるえていた。

天気予報が流れる。気圧の変化で、縦縞が緩み、今夜、夜半まで霧もしくは雨に変わるでしょう。続いて最新ニュース。いつの季節のものだろう。廃墟の原野に放たれた動物たちの映像。たとえ放射能に汚れた動物であつても、いくつもの色のない季節を生き延びた再会に、人は激しく抱き寄せてしま

う。身元不明など人の心は許せない。生きて来たということはそういうことだと、まるで閉じた魂に接続するサーモスタッフのように、フラスコの中の声は言った。

忘れる、忘れる？ 毒牙にかかったフラスコの中の小さな生き物、その母親みたいに、声はうろたえ、もがいた。そして言った。

あなたはかなしいのでしょうか、と。ぼくは病氣で呆けた親を施設に送り届けるところです。まるで見当違ひのことを青年は言う。次に泡立つ蒸留器に目をやり、再び「実験集」の中へ入つていった。一番愛した人は一番傷つけた人なのかもしれない。フラスコの中に小さな死骸。かなしいのはかなしみも伝わらないかなしみなのよ。泡が帰化してふつふつと忘れるように音を立て、熱して分離したら柔らかな涙になつた。

雪が消えた日、外は快晴だつた。しかしそんな晴れの日にも光線はこの部屋には届かなかつた。陽の光を遮るほどの茂みが辺り一帯に覆つっていた。呌きが聞こえる。わたしが死ななくともあなたはわたしを見つけてくれるの？ フラスコの中のものは、生きている人間のように、こうしてぼくをギョツとさせる。

一瞬花が咲いた蜜月の生き物たちに心労はない、と「実験集」に見つけた。濃いインク色の、鮮やかな青の、小さな花がフラスコの中に咲いた。あと幾年咲かせるのか、この花は。わたしが死ぬ前は一杯よ、と底抜けに笑つた人との、平和で静かなその庭に似ていた。自由気ままに咲かせた木や花も今はない。あなたは不精者ね、とその花は笑つた。フラスコを振ると、朝露のように、微笑して消えた。

そろそろ、命拾いの青年の話は終わる。次に生まれてくるための季節は夏に向かうのだろう。窓辺は零で一杯だ。フラスコの中のインク色の花はいよいよ青い。